

岡村幸宣さん

〔原爆の図丸木美術館〕学芸員

この美術館を守り続けなければならぬ

七十二年前、日本は二度にわたって核攻撃を受け、甚大で悲惨きわまる被害を出した。現場で起きていたことを絵画で表現した丸木位里・俊夫妻の『原爆の図』について、岡村幸宣さんに聞いた。

妖しい美しさすらあった

——原爆の図丸木美術館で働くようになった経緯を教えてください。

美術館との出会いは一九九六年春のことです。当時私は学芸員を目指して東京造形大学で学んでいて、学芸員実習で、丸木美術館にお願いして受け入れてもらったんです。

——広島出身の画家、丸木位里・俊夫妻による『原爆の図』に特別な思い入れでも？

当時はバブルの余韻が残っていた時期で、都内でも新しい美術館ができ、最先端の現代美術がもてはやされていました。大学の授業でも、新しいこれからの美術を中心に教わっていました。

けれども、社会で求められるのは現代美術だけではありません。授業で学ぶ美術や流行の芸術とは対極にある美術も知りたいと考えていました。それならバブルからもっとも縁遠そうな美術館がいろいろと、丸木美術館にお願いしました。

——『原爆の図』との出会いはいつですか？

中学時代です。教科書の口絵で『原爆の図』を知り

ました。それは十四部からなる『原爆の図』第二部の『火』でした。赤ちゃんが炎に包まれて焼かれている絵です。そんな残酷な絵を見たのは初めてでした。目を背けてしまいたくなる光景なのに、逆に目が離せなかつた。一筆一筆丁寧に描かれており、妖しい美しさすら感じました。強烈に記憶に刻み込まれました。

丸木夫妻は、家族を救出するために被爆数日後の広島に入った。投下直後に何が起きたのかを知らないから、体験者から聞いた傷ましい光景を、等身大で、そして美しく再現した。

私は、ふだん接する現代美術とはまったく違う『原爆の図』と向き合ってみたくて思っていましたし、し

かも丸木美術館は丸木夫妻と支援する人たちが作った手作りの美術館です。一般の美術館とは成り立ちも運営の方法も違う。大学で学んだ知識は、きつと役に立たないだろうと予想していました。そんな場所で自分を試してみたいとも思った。実際、初仕事はタケノコ掘りでしたから(笑)。

——タケノコ掘り？

そう。美術館の裏の竹藪で掘るんです。そして仕事が終わると近所にある茅葺きの民家で酒を飲む。

美術館を中心にして、近隣の人や支援者、画家たちの風変わりなコミュニティが存在していました。受け入れてもらった当初は、誰が職員で、誰がボランティアで、誰が客なのかわからなかつたですね。

そんな美術館に惹かれたこともあって、実習を終えたあともボランティアとして美術館に通うようになりました。そうしたら、当時の事務局長が、「大学を出たらうちで働かないか」と声をかけてくれた。けれども最初は断ってしまいました。不安があつたわけですが(笑)。タケノコ掘りや草刈りをしているうち、あつという間に時間が過ぎてしまうのではないかと。学芸員ではなく、墓守のような存在になってしまうのではな



●おかむら・ゆきのり 1974年生まれ。東京造形大学卒業。2001年から原爆の図丸木美術館学芸員。著書に『《原爆の図》のある美術館—丸木位里、丸木俊の世界を伝える』『非核芸術案内—核はどう描かれてきたか』など。